

ジモトで座談会 ～市長と明日のまちを考えよう～ 松南地区

1 開催日時・場所

- (1) 日時 令和8年2月28日(土) 午前10時～12時
- (2) 場所 松本市総合社会福祉センター 大会議室

2 テーマ

「みんなで紡ぐ安心の輪～つなぐ・守る・育てる松南～」

- (1) 小学校のPTAの変化に伴う地域活動について
- (2) 地区防災について

3 参加者 計43人

市長、危機管理部長

意見交換者(松南地区町会連合会、松南地区子ども会育成会、生活応援隊こだま、信明中学校生徒)9人
傍聴者25人、市関係者7人

4 次第

- (1) 開会
- (2) 市長あいさつ
- (3) 地区代表者あいさつ
- (4) 意見交換

ア 小学校のPTAの変化に伴う地域活動について

(ア) 松南地区子ども会育成会

(イ) 南松本2丁目町会

(ウ) 生活応援隊こだま

イ 地区防災について

(ア) 信明中学校生徒

(イ) 南松本1丁目町会

- (5) まとめ
- (6) 閉会



5 意見交換

- (1) 小学校のPTAの変化に伴う地域活動について

【松南地区子ども会育成会 笠井会長】

松南地区子ども会育成会の課題としては、役員の担い手不足が挙げられ

る。松南地区では、これまで育成会役員は全て小学生の保護者が担ってきたが、共働きの当たり前になり、役員業務は保護者にとって非常に負担感が強い。元々9町会それぞれの支部PTAから1名ずつ、計9名の役員が選出されていたが、今年度は4つの町会で支部PTA自体が形成できず役員が選出できなかったことから5名の役員で業務を担った。これ以上役員数が減少すると活動の継続が難しいため、来年度は小学生保護者に限らず各町会から1名選出いただくよう依頼したところである。

他には子どもの数自体が減っていることも課題である。三九郎などの行事は複数の町会が合同で実施することが増えた。合同で行うことで参加者数は確保できても、予算の配分や実施の判断などの場面では、町会支部PTA同士や育成会との連携、情報共有が十分とは言えず、運営の難しさを感じている。特に今年1月1日から運用された林野火災注意報への対応は、三九郎を実施する育成会・支部PTA・町会にとって非常に大きな負担となった。育成会への周知が12月26日以降という年末の時期になり、急遽新たな予備日や実施できなかった場合の松飾りの処分方法を検討しなければならなかった。これにより役員間に混乱と不安が広がった。安全確保が最優先であることは十分理解しているが、情報が直前に伝わることでその調整や判断の負担が全て現場のボランティアに集中するというを知っていただきたい。

そして、大きな課題として、「子ども会育成会の名簿に名前が載らない子どもがいる」ということが挙げられる。小学校入学の際にPTAに加入せず、名前などの情報提供を拒否した場合、町会ごとに組織する支部PTAや育成会にも情報が届かず、地域内にどれだけの子どもの住んでいるのか把握できないケースが増えている。これは日常の見守りだけでなく、防犯や災害時の安否確認の面からも非常に不安である。そこで市長にお願いしたい。市として、PTAや育成会に加入していない子どもたちも、責任をもって見守っていただけないか。地域の任意団体だけに任せるのではなく、学校や関係部署と連携し、必要な支援や見守りが行き届く仕組みを整えてもらえると現場の負担と不安は大きく軽減される。併せて個人情報に配慮した上で、子どもの安全確保を目的とした情報共有の仕組みづくりや、育成会運営の負担軽減につながる支援についても前向きに検討いただきたい。

育成会は行政・学校・地域をつなぐ重要な存在で、この仕組みが維持できなくなれば、地域で子どもを支える力そのものが弱まってしまうため、ご理解とご支援をいただきたい。

【南松本2丁目町会 古林町会長】

当町会では、育成会のお話にもあったとおり今年度育成会役員を任せる人

材が確保できず苦慮している。以前ある PTA の方から、「町会に入らなければ町会費を払う必要もないし、役員や当番が回ってくることもないから町会をやめた方が良い」とママ友から誘われたという話を聞いて驚いたことがある。そのような理由で町会に入っていない家庭の子どもさんもいるのではないかと危機感を持った。地域で見守ることも大切なので、皆さんに町会に関わってもらいたいと強く思った。

当町会では、以前から高齢者に対する福祉については手厚く行っていたが、子ども会については PTA に任せており町会としての繋がりがなかった。そこで 2021 年に町会活動に子育て世代や子どもたちが参加できるよう見直しを行った。例えば夏祭りについては、ビールや焼き鳥の販売中心のものから、無料でスイカ割りや花火、スーパーボール掬いを実施する子ども対象の行事にしたり、新年会で 0 才から小学生までのお子さんにお年玉を配るようにした。その甲斐あって親子で参加いただけるようになった。

また、青山様や三九郎についても人が集まらないことに苦慮している。町会の取り組みとしては、青山様のお神輿を作る際に使用する杉っ葉をどこで取ればよいか PTA の方々が困っていたため、町会から多賀神社の氏子総代の方をお願いして分けていただいておりますお神輿を完成させたということがあった。また、三九郎では、企業から年賀飾りやだるまを集めるのに、町会で軽トラックを出して企業を回り、焼くところまで運ぶといった協力をしている。

町内一斉清掃についても、これまで組単位での参加としていたものを町会全員参加に見直した。特に親子での参加を呼び掛けたところ、40 名くらいの参加だったものが、60 名以上の参加者となった。

育成会役員の選出については、小学生の保護者に限らず町会から選出することになり、引き受けても良いという方が現れた。少しずつ活動を見直していく中で、意識も変わってくるのだと思う。町会としても受身の姿勢で待っているだけでは子どもとの距離は縮められないという考えの元、事業に参加される子どもが一人でも増えるよう取り組んでいきたい。

【生活応援隊こだま 小野代表】

生活応援隊こだまは、10 年ほど前に、宮田東、宮田中、宮田西の 3 町会の民生児童委員を退任した方たちで始めた。こだまの名前は「助けて」や「お願い」の声にすぐに応えられるようにとの思いから付けた。当初は高齢者への支援を中心に活動していた。皆さんの声を聞いて、買い物の手伝いや送迎、庭木の伐採や草取りなどを行った。

今年度は子どもたちへの支援について、話し合い取り組んでいる。まず、新 1 年生の下校時の見守りを行った。そして、夏休みのラジオ体操に児童、

保護者、高齢者で参加しましょうと呼びかけ、延べ参加者数は児童が175人、大人が154人と合計で329人もの参加があった。育成会に加入していない子どもたちにも声掛けをしたところ、参加してくれたことが嬉しかった。開明小学校にも協力をしており、地域開放デーには授業参観に行ったり、ミシンボランティアとしてミシンの指導を行った。特にミシンについては、小学校の教員定数の関係で家庭科の専科の先生がいないため、担任の先生のみでは難しいところの手助けを行った。また、三九郎については、PTAの無い町会では実施が難しいとのことだったため、2町会でまとめて実施するよう声掛けをし、実施することができた。

大切だと思うことは、PTAや育成会に加入しているかないかで差別、区別をしないこと。子どもたちに悲しい思いをさせないように、平等に周知や声掛けをするよう心掛けている。

こだまについては、会員の高齢化により人数は当初の半分くらいになってしまったが、皆で協力し合い、どうしたら人数を増やせるか、事業を継続していけるかを考えていきたい。

【臥雲市長】

まず、笠井会長のお話から感じたことで、今一番スタートラインとして考えなければならないことは、家族や暮らしの形が大きく変わっているということとそれを真正面から受け止めてその変化に対しどうすれば状況を良くすることができるのかということをお話と一緒にご一緒に考えていくことだと思ふ。現在は共働きで子育てをする家庭が多数となった一方、子どもを支える組織については、働いていないお母さんが役割を担うという前提の仕組みのままであるため、現実的ではなくなっている。それでもお願いせざるを得ないとなると、活動から距離を置く方もいたり、新しい方が入ってこない状況にもなる。一部の方にはずっと役員を引き受けていただいたり、役員が高齢化したりして組織そのものが立ち行かなくなることもある。この点については、地域における活動をされている組織の共通の問題であると捉えている。関わり方をより緩やかなものに見直したり、そうした変化に対して市としては金銭的なサポートであったり、行政職員の伴走支援だったりということをお話まで以上に行うことが必要だと考えている。

情報提供のお話については、これまではどこの家に小学何年生の子どもがいるという情報を当たり前で共有して、それを基に活動していたが、今はそうした情報を共有したくないご家庭も増えている。学校もそうした配慮から名簿の提供はできなくなっている。この問題は〇か×か、0か100かという対応にならないことが大事だと思う。現実的なアプローチとして、教育委員

会を通じて校長先生から保護者の方への意向調査を実施していただくことが挙げられる。どのような情報をどのような事業を行うために地域に提供していただきたいかを丁寧に説明し、提供を拒否されている方についても周りの子どもたちが地域の活動に参加している状況を見聞きすることで、一步一步理解と共感を広げていくことが必要だと考えている。

三九郎の際の林野火災注意報について、これは昨年に関西圏で大規模な林野火災が発生したため、消防庁から各自治体で条例を作って対応するようとのことで、秋から進めていたものだった。そして1月から全国一斉にスタートしたが、聞いていない話が突然出てきたと感じられるのも仕方のないスピードだったと思う。これについては、今後情報が共有されていけば混乱は起きなくなると思うが、注意報などの情報をより速やかに共有するために行政として何ができるかを考えている。町会連合会の中田会長と相談しながら進めているが、スマホをベースとした連絡手段の導入を検討している。まずモデル町会に導入してみて、課題を見ながら全体に広げていきたいと考えている。

古林会長からは、難しい状況の中既に工夫されている取り組みについて、特に高齢者支援中心だったものを子どもへの活動にも広げていくという話をいただいた。高齢化も少子化も進んでおり、その両方に目を向けないといけないということが改めて問われている。町会から少し距離を置いている方たちに近づいてもらうためにも、子どもたちが地域の催しに参加して楽しそうな様子を見れば、保護者の方も「それなら自分たちもこういうことなら引き受けよう」というきっかけになるのではないかと感じた。町内一斉清掃に親子での参加を呼び掛けるなどは、成功例の一つだと感じた。

町会にしてもPTAにしても、元々の成り立ちは自発的な意思のもとにスタートした組織であった。必ずしも最初から全員加入というわけではないと思うが、それがあることをプラスに感じて増えてきたのだと思う。それが昨今家族や暮らしの形が変わっていく中で、プラスよりもマイナスを大きく感じてしまう状況があると思う。その状況を変える入口は子どもであると感じており、参加しやすい工夫などをしていただくことで繋がりが広がっていくと思う。

小野代表には生活応援隊こだまについてのお話をいただいた。令和7年に子どもたちを支える活動を始めたとのことだが、一番大切だと感じたのは差別、区別をしないという話だった。町会に加入しているしていない、育成会に加入しているしていないという区別は、一定程度しないと加入している方から加入する意味がないと思われる。一方で、裾野を広げていくためにはまず門戸を広くして誰でも参加できる状況から、町会や育成会の形の中

でも一緒にやってくれる方を増やしていくことを目指すものだと思う。お仕事を持っている方でもお手伝いなら参加できるということもあると思う。あれもこれもやらなければいけないとなると敬遠されてしまうので、ちょうどいい頃合いをどう皆さんで生み出していくかということも大事なポイントとしてお話を伺った。

市内の他の地域でも様々な取り組みがなされているので、そういった情報を住民自治局や地域づくりセンターを通じて皆さんにフィードバックしていきたい。

(2) 地区防災について

【信明中学校 生徒（井上さん、田中さん、渡邊さん、奥原さん）】

今回、探求学習のテーマとして地区防災を扱うことにしたきっかけは、信明中学校が避難所になった場合の想定避難者数を知って、防災倉庫の中を確認したことだった。探求の流れとしては、災害が起きた際の学区域内の想定被害を調べることから始め、最終的には避難所設営マップの作成と信明中学校オリジナルハグゲームを作成することを目指す。ハグゲームとは静岡県で考案された避難所運営シミュレーションのためのカードゲームで、その信明中学校学区域に対応した内容のものを作りたい。調査の方法としては、松本市のホームページの確認、防災倉庫の内容確認、市担当者へのインタビューを実施した。

まず信明中学校の避難想定について、震度5の地震が発生した場合に避難所が開設され防災倉庫を開錠することになっている。想定避難人数は2,763人とされているが、観光客などの想定外の方も含めると3,000人以上と予想される。

次に信明中学校の防災備蓄倉庫の中身だが、食料等の備蓄品は1日分を想定されている。避難が何日も続いた場合この量では不足してしまう。また、備蓄品には赤ちゃん用品、女性用品、ペット用品がないことが分かった。なんなんひろばの防災倉庫も見学したが、賞味期限切れの商品も含まれていた。防災備蓄倉庫の中身がこの状態では不安である。ただ、島内地区に防災物資ターミナルがあり、被害の大きさに合わせて防災物資の配布が行われることになっている。しかし、島内地区から信明中学校までの輸送手段は距離的にトラックや自動車となるが、道路状況によっては徒歩で運ばなくてはならないことも想定される。その場合、物資が届くまでに3日くらいかかると予想されるため、各防災備蓄倉庫にさらに物資を備蓄してほしい。

改めて市長にお願いしたい。防災備蓄倉庫の中身を今一度確認してほしい。賞味期限切れや使い物にならない備蓄品が無いようお願いしたい。また、各

家庭での防災意識を高めてもらうよう呼びかけてもらいたい。

今後は、防災備蓄倉庫に補充してもらいたい物品を市へ要望していきたい。また、オリジナルハグゲームの作成を進め、地域の方々と取り組むことで、災害発生時に備えられるように探求したい。

【臥雲市長】

探求の学びということで、皆さんの意欲と成果を感じた。いただいた提案や指摘の中で、私たちが受け止め変えなければいけないと思った部分と、私たちが皆さんに伝えきれていないところもあると思った。その中で、各家庭への呼びかけについては、まず私たちがやらなければいけないこと。大規模災害への備えとして、自分が最低3日間暮らせるだけの備蓄を各家庭で行ってほしい。このことを私たちが皆さんに十分お願いできていないことで、避難所の備蓄品が足りないという指摘の出発点になってしまっている。まず各家庭で備蓄を行っていただき、そのことについて私たちも支援をしていきたい。

次に避難所で受け入れきれないということについても、十分に伝えきれていないことがある。本日「在宅避難のススメ」というパンフレットを配布した。大地震が起きた際に家屋やライフラインの状態によって、可能な方は自宅で避難生活を送っていただく前提で、避難所の想定避難人数は計算されている。自宅で生活を送れる方が、それでも避難所に行った方が良いという気持ちになると、受け入れきれなくなる状態が発生することを改めて伝えていかなければならない。

備蓄品について、各指定避難所に備蓄するものと島内の防災備蓄ターミナルに備蓄しておく中身と量をどうするかは常に考えているところ。ある程度分散する必要がある一方で、松本市内でも被害の大きいところそうでないところが出てきた場合、被害の大きいところへ集中して物資を送らなければいけない状況も想定される。あまり分散されていると、集めるのに時間がかかるなどのマイナス面もある。あるいは、分散させるために各避難所の備蓄倉庫を大きくしなければいけないということもある。一番バランスの良い状態を、私たちが常に意識しなければいけないことだと思う。

【藤松危機管理部長】

市長からも自宅で生活できる方は避難所に行かずに在宅避難をという話をしたが、そのためにはまず家が壊れないことが重要となる。家屋を耐震化するとともに、家の中についても物が倒れないようにするなどの備えをお願いしたい。能登半島地震や東日本大震災などでは、地震による家屋の下敷き

などの直接死のほか、長い避難生活による持病の悪化やストレスからくる関連死というものがあった。そういったことを避けるためにも在宅避難の備えを進めてほしい。

避難者数の想定について、信明中学校の皆さんは南海トラフにおける地震を想定して探求いただいているが、松本市で最も被害が大きいと想定しているのが糸魚川静岡構造線断層という松本の下を通っている断層帯の地震となる。その場合、家屋が全壊、半壊した方やライフラインの途絶で生活できなくなった方が避難所を訪れ、1週間から10日をかけて徐々に減少すると想定している。松本市全体では88,000人が避難せざるを得ないが、そのうち半分の44,000人が避難所で生活する想定となっている。その想定の中で、信明中学校についても避難者の全てを受け入れることはできないと考えている。

次に各防災備蓄倉庫の備蓄品目を増やすというご提案、特に女性や乳幼児、ペット用品について、これは調べていただいたとおり島内の防災備蓄ターミナルから配送をすることになっている。各避難所に備蓄することについては、場所や管理の問題もあり難しい部分もあるが、常に見直していかなければならないと考えている。

自助のビジョンについて、各家庭における備蓄の呼びかけは必要だと思う。ハグゲームはぜひ作っていただいて、地区の防災訓練の際に地域の方々とそれを使った訓練ができると良い。自助の備えについてフェーズフリーという言葉があり、これは普段の生活がそのまま災害時の備えにも生かせるというもの。例えばカセットコンロは普段の生活でも使えるし、災害時にも使用できる。災害時にも使えるものを普段から増やしておくという考えも持っていたら良い。

【臥雲市長】

先ほどご指摘のあった備蓄倉庫の賞味期限切れの商品について、これは市の管理リストの不備で更新から漏れていたことが判明したため、すぐに入替を行った。このことを受けて備蓄品の管理リストについては、確認漏れが起きないように作り直さなければいけないと考えている。

また島内の防災備蓄ターミナルからの運搬手段について、全てとまでは行かなくても一部の区間の道路が崩れてしまうことは有り得るし、地区によってはトンネルなどの崩落も考えられる。そのような場合はヘリコプターで運ぶなど様々な手段の用意があることはお伝えしておきたい。

【南松本1丁目町会 百瀬防災部長】

昨年10月中旬頃、南部体育館で避難所開設、設営訓練に参加した。所要時間は約2時間で、訓練の内容はまず避難所運営チームを立ち上げ役割分担、施設の安全確認をし備蓄倉庫から必要物資等の運搬、そしてアクションカードを使った災害時のシミュレーション対応、簡易トイレや段ボールベッド、パーティションテントの組み立て体験など。

南松本1丁目町会では、いざという時のため訓練内容の要点をまとめたものを全戸配布した。内容は、避難の基準が震度6であること、一時集合場所が南松本保育園であること、指定避難所は南部体育館と開明小学校であること、避難所に着いてからの流れなどをまとめたものを記載している。

課題としては、要支援者・介護者を避難所へ無事に避難させるにはどうしたらよいかということがある。町会としてどこまで支援できるかということもあるが、隣近所の方の協力は必要になると思われる。あとは、避難所と防災備蓄倉庫の距離が離れていることも不安を感じている。現状リアカーが1台しかないため、せめてもう1台はほしい。もし可能であれば避難所の近くに倉庫を移してほしい。また、簡易トイレの設置について、実際に体験した際、体育館の和式トイレには上手く設置できなかった。扉も閉まらずプライバシーの配慮が困難だと感じた。指定避難所のトイレは優先的に洋式化してほしい。

いつ起きるか分からない大地震などの災害について、発生した際の情報の発信、収集、伝達が非常に重要だと感じた。

【臥雲市長】

非常に具体的で切実な問題を踏まえた要望をいただいた。その中で、直ちにやる予定があるものはトイレの洋式化である。令和8年度予算に計上しており、議会で認められれば4月以降に1階、2階とも工事を行う。小中学校でも一部和式トイレが残っているが、これらは全て洋式化するということで進めている。

南部体育館と防災備蓄倉庫が離れているというこの地区特有の問題については、調整するとしたら駐車場の利用を一部制限してそこに防災備蓄倉庫を設置するしかないが、現状として駐車場の利用もいっぱいである状況を考えると、どうするのが適切かは危機管理部や駐車場利用者と接点のある部局に考えてもらいたいと思っている。

【藤松危機管理部長】

防災備蓄倉庫については、駐車場の利用状況が非常に多いという状況を担当課から聞いてはいるが、避難所との距離が離れているのはやはり問題であ

ると考えている。現時点では難しいかもしれないが、引き続き良い方法がないか検討したい。

リアカーをもう 1 台購入したいとのことについては、市では町会の自主防災組織の整備に対し補助金を出しているので、活用を検討いただきたい。

【臥雲市長】

要支援者などの避難については、市の福祉部門において要支援者名簿というものを作成しており、町会役員だけでなく、民生委員も含めて名簿を提供し、防災目的のために活用いただくことになっている。活用の範囲については、各町会で責任をもって共有いただき、いざという時に備えていただきたい。ただし、その名簿に入っていない方々へのアプローチは難しい課題である。地区によっては社協などと協力し、独自の支え合いマップを作成しているところもある。

